

# 半導体業界のライオンズ

## シェアーを目指して

### 凛然として神楽坂からの挑戦

アンカー・ビジネス・シス  
テムス欄 代表取締役社長

永田 隆一



最近の経済情勢を冷静に眺めてみますと、創業

・起業にとっては、空前の大チャンス時代と捉える事ができます。これは、幕末維新や昭和二〇年代戦後の混乱期に匹敵するくらいの追い風であります。国の制度疲労も顕著になり、対応が充分とれない分野が多々出てきております。また、大企業では、手をだせない小規模の新市場も数多く顕在化してきております。『よし、私たち仲間です。』よし、私たち仲間です、とりあえず打って出しましょう』と、夢に挑戦していただきたく思います、その中から、必ず大業を成し遂げる多くの企

業が出てくる事と予想できます。

シリコン・バレーでは、起業の際、ネームバリューのある経営陣や後見人の陣容さえ整えば、事業計画書だけで、ベンチャー・キャピタルや個人投資家からの出資を受ける事が出来ます。しかし、昨今では、早期のリターンを求めざるを得ないベンチャー・キャピタルの出資を嫌い、仲間内だけで、ファイナンスの面をやりくりする『ブーツストラップ』方式を採用して実績を出しているベンチャーも多くなってきました。起業時の資本政策も多様性を見せ始め

ております。

例えば、弊社の場合、

## 発業(はつごう)で半導体業界へ元氣の新風をもたらし

すれば、しょぼくれてしまった日本は、確実に元氣になります』と仏教のことで説いておられます。

また、半導体業界においても起業の分野は、最先端技術だけではありません。ローテクや人手がかかるサービス業の中にもたくさん可能性がございます。創業者と仲間が共に感動できて、共鳴

告もでございます。米国・ヨーロッパでは、ドネーション(Donation・寄付)に近いベンチャー育成手法がございます。ドネーションという言葉は、もともと仏教の言葉でありまして、『ドナー』はお布施の意味でございます。インドを発祥地として、西へ伝達されて、ドネーションになり、方や、東アジア

ります。これは、すばらしいことでもあります。私も、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の技術委員・評価委員を拝命しており、実際にこの事を実感しております。ただし、地方での助成事情を鑑みますと、一変いたします。助成申請計画の変更を許してもらえない当局の担当の方が多く、書類の整備の煩雑さもあって、使った資金の半額のみ助成といった中途半端な助成ゆえに不必要な資金の使い方をせざるを得なかつたりしています。結局、時間と労力を消耗してしまふ事例が多くございませぬ。そもそも、ベンチャー企業とは、特に創業間もないうちは、自分たちの仮説や計画が正しいことを実証するために、日々のカット・アンド・トライが業務の中心であります、そして早期の朝令暮改が、生き残る為の、絶対で最強の武器であります。

助成申請計画通りの開発を行うようにと指示されても、ベンチャー企業には、実際に即した柔軟性が求められます。地方で頑張る私の仲間も、実力のある一本ドッコのベンチャー企業は、最初からこれらの助成施策の活用を検討いたしません。『旦那は、ちまちまお金を使わずに、理由を聞かずに、まとまったお金をポンとだす』のが理想であります。公の機関では、『透明性を担保せねばならないという重い責任』もございませぬ。致し方ない点もあり難しい課題であります。

三〇名の個人と一ベンチャー企業から出資をいただいております。しばらくは、ブーツストラップ方式が、弊社の資本政策でございます。

さて、奈良薬師寺の松久保秀胤長老は、『起業(発業・はつごう)によって、仮の命に己の意思をふきこんで、生きがいのある命(活命・かつみよう)を得て、活力のある企業が、どんどん誕生

トで伝わって、日本では、『だんな(旦那)』になったのです。旦那、相撲で言われるタニマチです。見込みがあると見極めたら、あせらせることをせず悠長に支援をして育てる仕組みです。最近の日本では、少なくなっております。しかし、最近の政府や地方自治体が、中小企業やベンチャー企業の育成を目的として、助成施策を充実して来てお

三年半前に、弊社は、起業を決断しました。敬愛するオムニ研究所の吉見武夫社長に最初にこの判断を報告した際に『良く判断した、サポートするぞ。これから地獄へしつかり誘って(イザナツテ)あげる。しかし、この俺の声は仏の声だぞ』御意。ありがたい言葉であります。(隔週掲載)

三年半前に、弊社は、起業を決断しました。敬愛するオムニ研究所の吉見武夫社長に最初にこの判断を報告した際に『良く判断した、サポートするぞ。これから地獄へしつかり誘って(イザナツテ)あげる。しかし、この俺の声は仏の声だぞ』御意。ありがたい言葉であります。(隔週掲載)